



発行2010年5月31日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel/Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

URL: http://www.hanzaki.net

NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

.....
ハンザキ研をめぐるスター⑮

タヌキ

タヌキ汁の中身はアナグマ（ムジナ）であると言う話は以前に書いた。もっともアナグマはイタチ科でタヌキはイヌ科と分類的には離れた存在とのことなのだが。今年のゴールデンウィークの賑わいの中で、小ダヌキが愛嬌を振りまいてくれた。ゴキブリ・ホイホイに掛かったネズミを食うために校舎に入ってきたようだ。あまり人を恐れる様子が無いのは誰かに飼われていたか餌をもらっていたのかもしれない。ある日に、生ゴミを道端に出しておいたら袋を食い破られて半分くらいが散乱していて集めるのに汗をかいたが、これもこの小ダヌキの仕業だった。バス停で待っていたら上流の方から道路の真ん中をトコトコと歩いてくるので見ていると座り込んで毛づくろいを始めた。そして、こちらの存在を承知の上でドンドン近づき、前を素通りしてバス停の数メートル横の笹藪で昼寝を始めた。全く人を食った奴だ。バスの運転手さんに教えたらびっくりして「ほんとに寝ている！」と叫んでいた（タヌキ寝入りではなく？）



ジムグリ?をくわえたタヌキ (撮影 黒田 真澄)

その後もウロウロしているようだが、しばらく姿を見ていない。居ることが分かるのは校門の石柱の側に“ためふん”をする場所があって、新品が追加され残されているからである。植物の種が多いように見えるので、かなりの雑食性のようだ。その一方でこの写真のようにへびを捕らえて食べているし、ゴキブリ・ホイホイのネズミも食った。へびはジムグリかと思うが生きているのを捕まえたばかりで、頭をくわえられてもがいていたそうである。逃げないので撮影もすぐ側からできたとマミちゃんはいう。



写真1 国道の真ん中で毛づくろい中の小ダヌキ



写真2 タヌキのためフン



写真3 ハンザキ1歳半の共食い



写真4 プレゼントされたヘルペンダーの模型



写真5 オリジナルのタオル



写真6 ヒダサンショウウオの卵のう

国際的タヌキ学者の池田 啓さんのこと

先月、池田さんの訃報が流れた。まだまだ若い 60 歳とのことであった。池田さんとは長い長い付き合いとなっていたが、あるシンポジウムで「栃本さんとは、あの長髪のように長いお付き合いです」と紹介されたことが忘れられない。そうです、私の長髪は今では擦り切れて短くなる一方なのですが、その昔には肩よりも下方に達していたのです。私の母は明治最期の年に生まれ、私たち 3 人の兄妹を女手一つで厳しく育ててくれました。時たまの帰京の際には、長髪をばっさり切っていたのですが、ある時テレビに写っている長髪を見られてしまったからは切るのを止めました。

池田さんとの出会いは、平成 2 年の災害を受けた兵庫県養父町の建屋川の河川工事に際してのハンザキ対策委員会でした。ご専門はタヌキなのですが、文化庁記念物課の調査官としては、花井正光さん（現・琉球大学教授）とお二人であらゆる天然記念物指定の動物に対応されていたのです。多くのアドバイスを戴き当時としては画期的な河川工事が実施されました。私は、姫路市立水族館の飼育係として、別世界かのような河川工事の現場に首を突っ込むことになったのです。島根県の瑞穂ハンザケ自然館の設立と一緒に係わったり、生野町内の市川水系での「餌付けハンザキ」問題でも貴重な助言をしてもらったことがありました。

ハンザキを巡って色々なお付き合いがあったのですが、池田さんの専門はあくまでもタヌキだったのです。タイトルの“国際的タヌキ学者”というのは、池田さんのお気に入りの自己紹介の言葉なのです。なんとなくいかかわしい人物の肩書きのように思えるのですが、ご本人は大満足のようでした。タヌキは欧米には生息していない動物であり、“国際的”といっても中国と日本だけだと笑っておられたことも忘れられません。「タヌキはぼくのたからもの」ポプラ社刊 (1994) という著書を頂きました。タヌキとの出会いから奥様との出会い、ご夫婦でのタヌキの子を育てる話、改めて読み直してみると“国際的タヌキ学者”の面目躍如たる物だと思います。

文化庁の調査官をやめられて兵庫県このとり郷公園の研究部長兼県立大学教授としてすぐ近くにやってこられた時に、「コウノトリはロシアで放鳥するんだ」と言われた時には驚きましたが、ロシアのコウノトリの血筋なのだからそれが当たり前なんだなと感心しました。国内での放鳥も限界が見えてきたところで、昨年に念願の“ロシア放鳥”が決まった所で計画が挫折したのは、ご病気の故かと、心残りのことではないかと察するばかりです。今後の豊岡のコウノトリたちの行く末を私も見つめていきたいと考えています。

私はこの 1 か月ほどタヌキと係わっている。ハンザキ研を中心に人見知りしない小ダヌキが活躍しているからだ。生ゴミの袋を破り、アマゴの餌のペレットが入っている袋に穴を開けて食い散らかしたり、特大のヤマビルを置いていってくれたりしている。無人撮影装置にもその姿が写っていた。このタヌキの姿を目にする度に池田さんのことが思い出される。“溜め糞”でその健在なることを確認はしているが・・・

第二回通常総会と特別記念講演

平成20年8月に兵庫県の認証を得てNPO法人として発足しました。今年は3年目になりますが、22日に総会を無事に終了することができました。設立総会と第一回の総会は市街地にある但陽会館（但陽信用金庫の美術館）を拝借しての会議でしたが、今回は年に一度くらいはハンザキ研の整備状況を見ていただきたいという強い私の考えからハンザキ研で開催いたしました。旧・黒川小中学校の講堂兼体育館は百席ほどの小学生の机が並べられています。ここに30席ほどのテーブルを設置して会場を設営しました。

出席者は昨年同様に30会員で、十分な空間を持って会議ができました。ただ、総会と言うのは数字の確認といったあまり面白みの無い会になるのが通常です。私も幾つかの会での拍手要員として出席した経験があり、面白くも何とも無いことでした。姫路市立水族館の副館長時代にハンザキの研究で日本動物園水族館協会の総会において表彰を受けて記念講演をしたことがありました。総会の方は当時の竹尾館長に任せて、講演を済ますと釧路から早々に抜け出して羽田へ飛びました。着陸して降りようと出口に向かうと、前方には秋篠宮殿下（日本動物園水族館協会の総裁）御一行がおられました。お忙しい殿下ですから、総会には出られることは無く、講演などを聴かれてのお帰りだったようです。ふと、振り向かれた殿下が私に目を止めて「もうお帰りですか？」と声を掛けてこられました。数時間前に講演をした者の顔を覚えてくださったのです。「つまらない総会は館長に任せて、久し振りに東京で情報収集と親不孝者が母に顔を見せに行きます」とお答えしました。以来年々の総会では「ハンザキはどうなっていますか？」と声を掛けていただくようになりました。

総会のような決まりきった会議に出席するには、何か引き付ける物が必要です。それには記念品とか著名な方の記念講演などが考えられます。会議のスケジュールを会員の皆様へお送りしてから、急遽これらの点を考えて実施することにしました。記念品としてはオリジナルのハンザキ研タオル、記念講演は長年のお付き合いがあった日本ウミガメ協議会代表の亀崎直樹博士にウミガメのお話をお願いしました。亀崎さんは、この4月から神戸市立須磨海浜水族園の指定管理者交代に伴い、新に園長になられたばかりで、ご多忙のところ急なお願いを受けていただき感謝しています。講演会は一般公開ということで、会員以外の参加もあり、一般市民と研究者とのタッグでアカウミガメの生態調査が飛躍的に進んだと言う感銘的なお話でした。研究などと言うと一般の方には縁遠いことと思われることと思いますが、その一方で無数の市民の観察の目によってもたらされる情報の莫大なことは想像以上のものがあります。多くの方々がウミガメの存在に目を向けるということが基本的な保全の力になっていくものだと思います。

私も、ハンザキ研の活動の根本にはハンザキのことを多くの方に知っていただき、関心を持っていただくのが、ハンザキの保護保全に役立つものとしています。このような地道な活動は、多くの方々の賛同を頂けねば成り立ちません。今後ともよろしくお願ひします。

ハンザキ研日誌

2010年5月

- 1日 ゴールデンウィーク公開～5日まで、初日6組17名、スタッフ8名
- 2日 ・河川工事の現場からイシガメ37個体、マイクロチップで登録し放流
・カニ籠13設置
・G. ウィーク 2日目 16組44人、スタッフ8名
- 3日 ・G. ウィーク 3日目 24組75人、スタッフ7名
・カニ籠にハンザキ2個体入る、共に再捕個体
- 4日 ・G. ウィーク 4日目 18組59人、スタッフ6名
・カニ籠にハンザキ1個体、これも再捕個体
- 5日 ・G. ウィーク 5日目 15組38人、スタッフ6名
・G. ウィーク期間総来場者数：79組233人、スタッフのべ35名 実数13名
・小ダヌキが校舎の廊下を散歩、見学中の皆さん大喜びで撮影会となる
・ヒダサンショウウオの幼生2個体と13卵入りの卵のう展示
- 7日 ・市川・竹原野地区で瀬替により昨年の幼生4、1歳幼生11、成体1個体救出
・与布土川の堰改修工事現場からマイクロ・チップの入った1個体測定
・キッズラボ会議19～23時10名ハンザキ研にて
- 8日 ・市川・竹原野より0歳1、1歳6個体収容
・大型冷蔵庫2台、ロク・ログより受贈
- 9日 ・加古川水系一ノ瀬川そばの水田からハンザキ1個体救出、マイクロチップ挿入
・GS-301 終了(4月6日～)
- 11日 ・GS-302 開始(～5月30日)
・シルバー生野の栗屋社長視察に来所
・生野小学校・三宅教諭、今月27日の5年生の自然学校の視察に来所
・9日に収容したハンザキを一ノ瀬川へ原状復帰
- 12日 2歳ハンザキ幼生咬傷で死亡(残2個体)
- 13日 ・会員のジョンソン氏からヘルベンダーの模型が届く(全長55センチ)
・今鷹会員がオタマジャクシ・ラベルの酒持参
- 14日 ハンザキの月一回の健康診断(奥藤修・竹村剛両氏他)
- 15日 ・NPO事務局会議、6名
・西日本エコテック来所、観察カメラの調整
・日本工科専門学校生6名、実習に来所
- 16日 上田浩氏、日直開始(3名の交代制となる)
- 17日 市川・簾野から285匹のハンザキ収容
- 19日 嵯峨山・朝来市副市長視察に来所
- 20日 ・建設技術研究所の坪井氏来所、出石川のハンザキの件で
・阿蘇会員、1～7歳生のカヤの苗10鉢搬入

- 20日 ・構内でモリアオガエル、初産卵、例年並み
・ハンザキ研のオリジナル・タオル納入
- 22日 ・NPO 第2回通常総会、初めてハンザキ研にて開催、30名参加
・記念講演、神戸市立須磨海浜水族園園長の亀崎直樹博士「市民と研究者が明らかにしたアカウミガメの実情」(一般公開)
- 23日 童話作家の野田道子さん来所、ハンザキ物語の取材
- 26日 カキ・ウメ・リンゴ・カヤの植樹
- 27日 ・生野小学校5年生38名来所、全員がハンザキに餌を与えて大喜び
・オオサンショウウオ保護センターの給水配管修理
・ミニ・アクアリウム水槽のイモリが産卵を開始
・無人撮影カメラ設置
- 29日 初夏のトレッキング“河畔林と山野草”観察会実施、森定学芸員の講話で12名参加、スタッフ4名
- 30日 GS-302終了(5月11日～)
- 31日 大阪府安威川ダム建設委員会

(今月は29日の在所で、今年1月から144日となる)

.....

ハンザキ所長のツブヤ記録

新年となり、あっという間に4月の新年度が動き出した。そしてNPO法人としての年度の締めくくりとなる通常総会も終了した。会員数は260名を超えたが、継続か退会されるのかここらで一度整理をすることになった。設立に当たっては無理な支援をお願いした方もあったに違いない。ただただ有難うございますと言うのみですが、できるだけ多くの方の長いご支援を頂きたいと思います。当研究所が50年百年存続することができれば、ハンザキの寿命を始めとして多くの生態も解明され、河川工事に際しての有効な助言もすることが出来るようになるだろうと思う。日本にしかない貴重な生き物であるハンザキなのに、いまひとつ派手さがなければ、皆さんの意識にも上りにくいようだ。私に残された役目はハンザキのことを多くの方々に理解していただき、今後の調査研究が若い人たちに受け継がれるようにすることだと思っている。私がハンザキに携わって36年目になるが、あと何年かは頑張りたいと考えているものの、こればかりは思うとおりにはいかない。

とは言いながら、毎日が楽しいことばかりであれもこれもやりたいと言う状態で、行く先々で用事を忘れて別のことに手を出してしまう。しばらくすると、そこで何をしようとして来たのかを忘れて別の作業にのめりこんでいる。やりっぱなしのことがあちこちに残されていく。そして日が変わりまた同じことが続く、その間にはあまり楽しくないこともあってやむなく片付けに掛かるが、終われば早々に山に籠もることにしている。かくて5年の歳月が過ぎた。

(本誌は「三井物産環境基金」の助成を受けて作成しています。)